

記録

フィルム

カラー／21分

■自主企画

■指導・監修

佐伯真人（文部省初
等中等教育局教科調
査官）

高橋 敏（国立歴史
民俗博物館教授）

唐沢勝敏（全国中学
校社会教育研究会会
長 東京都文京区立
文林中学校校長）

■協力

（財）日本視聴覚教育
連盟

スタッフ

■製作

村山和雄

■脚本・演出

大島善助

■演出助手

大森直子

■撮影

木村光男

■撮影助手

今野聖輝

■照明

本橋俊男

■録音

堀内戦治

■編集

大島善助

■ネガ編集

加納宗子

■音楽

長沢勝俊

■解説

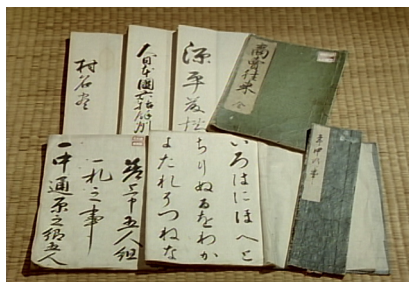
生野文治

文部省選定 1995年教育映画祭最優秀作品賞・文部大臣賞

近世末の日本における技術と生活の著しい変化・発展は、明治以降の日本の近代化の礎として大きな役割を果たしている。中でも識字率の高まりは、その新しい時代を支えていた。歴史の流れの中で「文字の普及」が果たした役割を考える。

■協力・資料提供

群馬県富士見村教育委員会／柳井久雄／船津洋平／今井善之輔／青木 裕／群馬県立文書館／群馬県立歴史博物館／群馬大学附属図書館／群馬県立境高等学校／埼玉県立文書館／東京都公文書館／東京都江戸東京博物館／国立公文書館／東京国立博物館／東京大学附属図書館／東京大学社会情報研究所／東京大学文学部国文学研究室／東京農工大学工学部附属繊維博物館／国立国会図書館／国立歴史民俗博物館／謙堂文庫／（社）温故学会／くもん子ども研究所／村井かるた資料館／（財）藤田美術館／久我周二（木版彫り）／高橋新治郎（摺り）／東漸寺 他



江戸時代の中頃までは、文字を読める者は多くはなく、高札や御触れは、読める人が読めない人々に読み伝えた。

上野（こうずけ）の国、現在の群馬県は養蚕業の先進地で、その赤城山麓の農村、富士見村原之郷には、4つの寺子屋が開かれていた。そこでは、読み・書き・そろばんが基本で、教科書も「養蚕往来」「商売往来」や「名頭」など、実用的なものが中心であった。また『源氏物語』や『奥の細道』なども無料で貸し出されていた。それら書物は、一文字一文字版木に彫り、手作業で摺って印刷した木版である。印刷技術は優れた職人によるもので、人々は印刷された書物を、貸本屋から借りて読んだ。当時十返舎一九著『東海道中膝栗毛』は、絵も取り混ぜて人気を呼ぶ。本の他にも引札（ひきふだ 広告ビラ）瓦版、カルタなど、文字は人々の間に浸透していった。式亭三馬は、『浮世風呂』の中で、江戸の子供たちが寺子屋へ通っていたことを描写している。

最近の研究では、寺子屋は上州（現在の群馬県）に1,500、日本全国では6万はあったと考えられている。その根拠が筆子塚（ふでこづか）で、師匠の徳を慕って筆子たちが建てたものである。